五回（明治四十四年）までは勿論自らの修業は別として、何等の對社會的仕事をも見せなかつた。私はその時代を今記憶の底に殘してゐないが、恐らく私の畫が落選したか、妙な權力的安定に不滿をもつたのか、そのいづれかに原因して私は第三回第四回に製作一點發表してゐない。審査員と稱するものゝ顔觸れも固定してゐた。相前後して歸つて來た人には、有島生馬、山下新太郎、齋藤豐作、湯淺一郎、白瀧幾之助、南薫造の諸君があつた。がこの人達が歸つて來ても、日本の美術界はその障壁を撤廢して迎へ、新な戰術を充分發輝させやうとはしない。こはばつた繼子扱ひでなければ、全然除外視して、一向に溫顔を向けやうとはしなかつた。

私はそれでも第五回に『幸ある朝』『チーヴオリ・ヴキラ・デスタの池』の二作を文展に出品してゐる。そして私はこの主題による『私の足跡』の一端にふれていかなければならない使命に到踐した。謂はゞ前書は序文である。がこの序言なしには『私の足跡』の第一歩をも構成することは、恐らく出來ないであらう。

（未完）（文責在太田耕治）

（『美術新論』第五巻第四号。昭和五年四月）

③ 辻村松華の休職、渡仏

辻村松華（本名延太郎。漆工科教授）は仏国ガイヤールの招聘により明治三十八年十一月十八日パリへ向け出発した。辻村の履歴書（本学蔵）には次のように記されている。

明治卅八年十月七日　任東京美術學校教授　内閣
同　　叙高等官八等　同
同　　十二級俸下賜　文部省
同月廿五日　叙正八位　宮内省
同月廿九日　文官分限令第十一條第一項第四號ニ依リ休職ヲ命ズ　文部省
同月　佛國「ガイヤール」ニ聘セラレ同工場ニ於テ髹漆蒔繪ヲ傳授シ旁ラ蒔繪ノ應用範圍ニ就キ調査研究ス
同卅九年九月　佛國巴里「フヂナワー」工場ニ於テ「ドリユール、ベヤルニー、マタン」「ヴァニス」類塗料ノ製作ヲ實地練習ス
十二月　瑞西國ジュネーブ市女子工藝學校ノ聘ニ應ジ一箇月間交換教授ヲ爲シ錫板彫鏤ノ技術ヲ練習ス
同四十年一月　獨逸、ベルジック、英國ヲ歴視シテ歸朝ス
十一月廿八日　休職滿期〔退官〕

辻村は藤島武二と反対に大変筆まめで、横浜出港後パリ到着までの見聞を校友会に書き送り、それが「渡仏記行」として『東京美術学校校友会月報』第四巻第六、七、九号に連載されており、また、パリやジュネーブ滞在中の書簡も同誌に掲載されているが、一緒に出発した藤島の消息をそれらから得ることはできない。ただ、パリに着き、先ずスフロー・ホテルに入り、そこで偶然白浜徵と桜岡三四郎に出合い、「五六日滞在して、都合上菅原氏と外一名とは、他

のホテルに引きうつツて、自分一人が此ホテルに滞在する、藤島佐藤の両君は、フハーシーに」引き移ったという簡単な記述があるのみである。

④ 第一回彫塑展覧会

彫塑会が明治三十五年五月の第三回展を最後に立ち消えとなったあと、彫刻科の卒業生たちは彫塑同志会や三四会に加わって研究を続け、東京彫工会、日本美術協会の旧風に対抗する姿勢を示した。

彫塑同志会は在京の本校彫刻科卒業生による組織で、前出の「研究会」（本書72頁記事参照）はこれに当たると考えられる。結成は明治三十六年九月頃と思われ、隔月に常会を開き、毎回課題と作者を決め、作品を持ち寄って合評した。例えば第三回常会の模様は次の如くであった。

○彫塑同志會　東京美術學校彫刻科卒業生中の在京者の組織せる同會ハ第三回常會を去三十日午後上野公園内東花亭にて開きたり　當日出品の重なる者ハ長愛之氏の寒さ（薄肉）山本筍一氏の寒さ（胸像）紫野健作氏の平和（全体物）の諸作なり　次回の課題ハ「恐怖」にて抽籤の上製作者ハ中村直彦、渡邊長男、黒岩淡哉、遠藤忠雄、毛利教武、山崎和治[沾]、松原象雲、細谷三郎の八名と定まりたり

（明治三十七年二月一日『読売新聞』）

次に三四会は、明治三十一年頃山崎朝雲、海野美盛、新海竹太郎、米原雲海、沼田一雅らが結成した「あとう会」という研究グループがあり、これが同三十二年に三三会（会員が九名だったことによる）となり、同三十五年春に三四会へと発展したもので、「毎月十五日に例会を開き、毎回二種のテーマを決め、それぞれに三名ずつの作品を出品、会員相互で批評研究しあった。」（『山崎朝雲資料集』昭和六十二年。福岡市美術館協会）という。課題は「酔顔」「ハイカラ」（明治三十六年九月）、「寝顔」「死」（同年十月）、「風味」「活気」（同年十一月）、……「老翁」「ほおかむり」（同三十七年七月）等々が出題されている。岡倉覚三校長時代の遂初会と似通ったかたちで活動を続けていたらしい。また、上記の彫塑同志会の活動形体もこれとよく似ている。三四会は木彫界の革新派が中心となって起こした団体で、洋風写実主義彫刻法を採り入れて革新を試みていた。会員は多く、本校彫刻科卒業生の中にも本山白雲、渡辺長男、山崎和沾、本保義太郎、長愛之、細谷三郎、黒岩淡哉、山本筍一、水谷鉄也等は同会に加わっていた。また、卒業生の中には三四会と彫塑同志会の両方に参加している者も少なくなかった。

明治三十八年五月に至り、彫刻科卒業生による彫塑同窓会が主催する第一回彫塑展覧会が上野公園旧五号館で開催された。旧彫塑会メンバーが中心となって開催したものであるが、明治三十七年十二月九日付『読売新聞』に「彫塑展覧会　白井雨山氏主となり同展覧会を来春上野五号館にて開会すべしと」という予告が載っているところをみると、新帰朝の雨山が尽力したことが考えられる。

この展覧会について『東京美術学校校友会月報』第三巻第八号は次のように伝えている。